

大妻女子大学 茶道部 創立50周年記念 雪待茶会

茶道部だより

1999. 12. 12
発行 大妻女子大学
茶道部
責任者 子希子
天野有希 川妙正
石瀧浪

本日は、雪待茶会にお越し頂きまして誠にありがとうございます。

本年の雪待茶会には、大妻高等学校茶道部、大妻女子大学狭山台校茶道部、大妻女子大学多摩校茶道クラブの皆様方にご参加頂きまして、このような五席の盛大なお茶会を催すことができました。

本学茶道部は、五十年という記念すべき年にあたりまして、私達は大変光栄に思っております。

先輩方から侘茶の心を受け継ぎ、部員一同、尚一層のお稽古をつみ重ねていきたいと思っております。

五十年のあゆみ

現在、私達本校のお茶室は、地下一階から屋上まで吹き抜けのアトリウム(学生ホール)に接した、学友会関係室内にあります。広間三十畳と、「大妻庵」という、又隠写しの大変立派な小間にて、総勢三十四

名でお稽古致しております。

当初のお稽古は応接室のジュータンに座り、そのうち畳を二畳もらい、体育館の隅に敷き、お稽古し、貧困と苦勞のものであったと聞いております。

そして五十年前、関東大学茶道連合創立の折、一般入会大学第一号として大妻女子大学茶道部は、故柳澤宗淵先生の手により入会したそうです。この茶道部創設は、大妻コタカ先生の念願であったそうです。

ことば

私達はお茶会るときに、一服のお茶をおいしく召し上がって頂くために、ドキドキしながら点てております。お茶とは、亭主は客に心をつくしてもてなし、客は亭主のもてなしに答える、そしてお互いの真心が通いあい、人々との出会いを大切にすること、そして楽しさを知り

ました。
真心のこもったおもてなしを心がけたいと常に思っています。

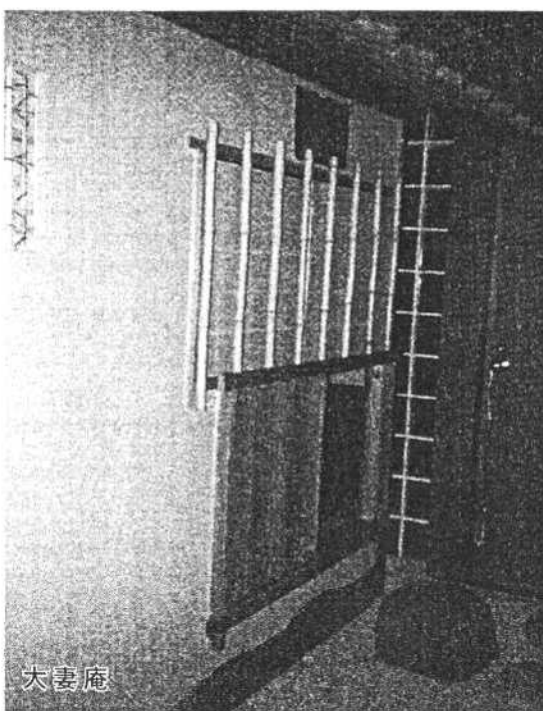
雪待茶会

「雪はまだかな？」と待っているこの季節、毎年恒例の靖国神社境内のお茶室をお借りして、雪待茶会を催します。本年は行雲亭と靖泉亭をお借りしました。行雲亭にて、千代田校茶道部二、四年が広間、一年生は立札、高等学校茶道部の皆様は中の

広間、多摩校茶道クラブの皆様は小間、靖泉亭にて狭山台校茶道部の皆様、の計五席を設けました。

雪待茶会は、この名前で昭和五十一年度から始めてから二十三年がたちます。長年続いてきた歴史は大変すばらしく思います。毎年毎年、先輩方はこの二年間の集大成にと心をつくして、立派な茶会を開催してこられました。

そして本年は、創立五十年というところで、他校の方々のご協力もえまして皆で力を合わせ、この伝統とともにさらにすばらしい茶会をと、この日のために頑張ってきました。皆様にお楽しみ頂けましたら大変幸いです。



大妻庵

創立五十周年に寄せて

私達が日ごろお世話になっている先生方に、大変ご多忙のところを、ご執筆頂きました。みな、心あたたまるお言葉を頂戴しまして、ありがとうございます。茶道部一同は和敬清寂の心をもって、日々のお稽古を精進し、楽しみながら成長していきたいと思っております。



学長

中川 秀 恭

茶道部創立五十周年、まことにめでたく、心からなる祝意を表します。

その間、柳沢信隆先生、齋藤宗雅先生ご指導の下、歴代の茶道部役員の精進、努力によつて多くの「茶人」が育つたことと思ひます。

私の尊敬する知人に加藤六美(むつみ)という先生がいます。この方はたしか建築学が専門で、東京工業大学教授、学長をつとめ、その後人事院の

人事官をされました。お若い頃からお茶の道に入られ、かたわら焼物にも精を出し、国内数ヶ所に窯を設けて季節毎にあちこちの窯で茶碗を作り、その展示会を毎年三越本店で開いておられます。

その先生のお茶の席に一度出たことがあります。場所は八王子市野猿峠の大学セミナーハウスでした。出来上つたばかりの建物の日本間、林の中の静かな所であります。

先生はお茶を点てる所作の一つ一つが如何に理にかなっているかを説明された後、おもむろにお茶を点てられましたが、驚いたことに見る見る姿かたちが改まり、お顔は生氣に充ちて若々しく、全体が言い知れぬ品位に輝くような印象を受けました。

私達同席の者は順々に一服いただきましたが、気分爽快に、清新の氣に充ちたとの感じを受けました。

皆さんのかまえるお茶の席でも同じ印象を受けるに違いありません。皆さん自身も師範の先生を通して同じ経験を

しておられることでしょうか。こうして、立派な大妻人が育つていくのだと思ひます。

「茶室は寂莫たる人生の荒野における沃地(おあしす)であつて、疲れはてた旅人たちはここに会して、芸術観賞という共同の泉の水を酌むことができる」(岡倉天心、「茶の本」、より)。

大妻女子大学茶道部ますますのご発展を祈ります。



学生部長

小林 靖 之

私は茶道については全くの門外漢ですが、昔の事を調べるとは好きなので十年前の四十年記念誌には当時の経理部から聞いた大妻の茶室の話を書きました。しかし、一部不正確でしたので書き直してみました。

大妻学院は創立以来茶道を大切にしてきました。特に終戦後は立派な茶室が必要でした。昭和四十一年秋、希望がかない当時の新館の六階部分に茶室と三十畳の和室を設けることができました。この茶室

誕生に貢献されたのは学院の故柳葉キヨ先生と茶道部師範の故柳澤信隆先生でした。お二人は我が茶室を京都裏千家の茶室で、利休四疊半の典型である「又隠(ゆういん)」写し(同型)にしたいと考えました。そこでやはり写しである靖国神社洗心亭の「又隠」にそっくりに造らせたのだそうです。

この茶室は完成後「大妻庵」と命名されました。やがて学院の全面改装工事により、平成二年には現在のC棟地下1階の課外活動施設の一面に移設されました。しかし建設当初の茶室の襖、棚、窓等の建具、木材は極めて優れたものでそのまますまわりました。この大妻庵は今なお大学の茶道部茶室としては画期的なものであるとのことでした。



千代田校 師範

齋藤 宗 雅

大妻学院に茶道部が誕生、スタートしてから今年五十周年を迎えました。まことに喜ばしい限りでございます。

実に半世紀を着実に活動し続けて今日に至つたのでございます。

お若い方々が日本の伝統ある茶道を熱心に学ぼうと稽古に励む姿に心うたれます。正座して亭主は心をこめて客に一碗の茶を点て、客は亭主の心入れに添えて、主、客、ともにお互いに思いやり、相通じ合う心がお茶の心と思ひます。

私が昭和五十年に始めて茶道部の指導にあつたのは旧校舎の6階で、大きな活動室があり、廊下をへだて、向い側にすぐ目に入るのが、茶室「大妻庵」の扁額でした。

四疊半の茶室のとなりにには良く出来た大きな水屋がありました。この茶室大妻庵が、只今地階アトリウムの一隅にそのまま復元されております。にじり口や窓の木材、水屋の出入口の杉戸等は当時を偲ばせて静かなたたずまいを見せております。

道具も校章紋を絵付けした茶碗や、縁の屏風を大切に使用しております。

大妻女子大学の茶道部員一同が心を合わせて次の時代へ正しく、美しく、思いやりの心を以つてしっかりバトンを渡して、更に活発に活動して

いってほしいと思います。
今回の「茶道部だより」は全部、部員の皆さんの手作りと聞きました。

茶道部の益々のご発展を祈ります。



千代田校 顧問

石井 とめ子

大妻女子大学茶道部は、本年度で創立五十周年を迎えました。半世紀にわたる年月を受け継がれたことは、誠に喜ばしいことです。

それにしても茶道部を創設してくださった諸先生方も故人となられるという永い年月にあらためて感慨深いものがございます。

私は昭和六十二年（一九八七年）から三代目の顧問を引き受けして、はや十三年をへて今日に至っております。顧みますと四十周年を迎えた折には、茶道部の歴史を記録すると共に創設以来の会員名簿を整理して「茶道部だより」の発行を試みました。その当時は柳澤信隆先生も未だご健在で茶道部創設時の状況を明

確に記す事ができまして、本当に幸せでした。その翌年、不幸なことに先生の訃報に接しました。

次いで四十五周年には、大妻庵が千代田校C棟地下にしっかりと移築復元され、恵まれた環境が整いました。

さて、五十周年を迎えるに際して、従来慣行の雪待茶会として行うか、役員と検討を重ねました。昨年、大妻学院創立九十周年を迎えた大学の現

状は、家政学部、文学部、社会情報学部の他に人間関係学部、比較文化学部が多摩校に開学され、女子大学としては初めての五学部をもつ総合大学へと発展を遂げ、千代田校、狭山台校、多摩校の三大キャンパスに拡張されました。茶道部も表千家・裏千家（多摩校）と

各々が活動の充実発展を計っております。それぞれ流派は異なるもその根本は千利休の茶心を継承してきますので、全学的の祝祭行事にと提案しましたところ、役員の賛同を得ることができましたので計画を進めて頂きました。

以上の主旨は大妻先生の「和」の心と同一と思われま

ので、本年は雪待茶会を契機として流派を越え、大妻庵に

宿る大妻コタカ先生の精神「和」の心を心としてお互いに交流を深めてくだされば幸いです。一ヶ月有余でミレニアムを迎えますが次の世紀にも茶の心が受け継がれることを期待いたします。



高等学校 師範

菅生 宗 其

大妻学院茶道部創立五十周年おめでとうございます。

恩師柳澤宗淵先生のお供で茶道部にお世話になって早二十五年余の歳月が経ちました。感無量の想いです。かつて表千家のお招きで京都の不審庵へ参り学校茶道の指導法等の話題がありました。大妻学院

茶道部での柳澤先生のご指導はお湯の入っていない釜での稽古から少ない道具、水屋のない茶室でも基本と応用をふまえた修練により立派なお点前は出来ることを学びました。

ご承知の通り伝統芸術としての茶道は利休によって大成され四百年余の今日、尚、日本文化の粋として脈々と受け継がれております。茶の作法の技

にもまして「思いやり」と「優しさ」の心のお茶を大切にしてお参りました。稽古を始める前の準備、茶室へ入る姿勢、履物の脱ぎ方、歩き方など中学校六年間の成果は微笑ましい上達ぶりです。夏期集中稽古は、楽しく、厳しくをモットーにしております。秋の文化祭には和服の着付けも出来て高校生らしい楚楚とした着物姿でのお点前、半東、お運びと活

き活きとした振る舞は可憐で美しいものです。基本は一つですが、それぞれにふさわしいお茶、ムダのない美しい所作の茶道でありたいと思っております。学窓を巣立ってもお茶を修得して本当によかったと思つて下さることを願い、伝統ある大妻学院茶道部のさらなるご発展を祈つてやみませ

ん。

私共、狭山台校茶道部を少し紹介させていただきます。毎年六月には都内のお茶室をお借りし、水無月茶会を催します。これは二年生を中心に他大学の学生との交流の場ともなり、茶会の楽しさ、人との出合いが良い経験になります。秋の文化祭（狭山祭）では五月に入部された一年生が、夏の合宿で二年生より指導を受けた成果を発表する茶会となります。入部時には難しく緊張していた一年生も当日は一席を無事にお点前が出来る程の進歩です。文化祭が終了すると一月のお初釜に向けてお濃茶のお稽古をいたします。二年間と短い中で薄茶、お濃茶と基本のお稽古を中心にして

おります。三年生になられると茶道を辞めてしまわれる方



狭山台校 師範

塚原 宗 康

大妻女子大学、茶道部創部五十周年おめでとうございませ

この度、五十周年を迎えら

が多いのは残念に思っておりますが是非続けられるようお願いいたします。

狭山台校は都心から離れておりますが機会がございましたら十月の文化祭にお越しくださいますようお願い申し上げます。

狭山台校茶道部も千代田校茶道部を目標にして部員一同、精進して参る所存です。

千代田校茶道部の益々のご活躍とご発展を心よりお祈り申し上げます。



多摩校 師範

中村 宗洋

風花の舞うや、めぐり来し年の瀬に、清らなる雪待ち茶会の懸釜にて、お祝いさせて頂きます事、まことに光栄と存じます。

御学院茶道部の皆様方の、真摯なるご精進の五十年のお歩みを、心より寿ほぎ御祝い申し上げます。同じ半世紀の時を私も又、茶道をお教える立場で学んで参りましたが、多摩校茶道部の方々とご縁をいただいて共に歩きました歳

月は、茶道の原点を再確認いたすことのできました尊い月日でございます。そして、「人間の精一杯の思いやりと善意を、態度で示すのが、お茶の点前である」という教えを、実に素直に体得されてゆかれる部員の方達の姿の美しさ、点前の意義というものを直感的に理解する事のできる天性の素質のやさしさ……に私はいつも心洗われる、清々しい思いを懐いてまいりました。「大妻生の皆様は、優しいのが特長ですね」との、ある方のお言葉に、我が事のように喜び、納得した事が思い出されます。

伝統というものが、人々の真心の結集により築かれゆくとき、そのなかにて育まれる者は、命すこやかに、光かがやくのであります。この度雪待茶会に参加させて頂きました事は、創立の日も浅い未熟な私共の、大きな飛躍となりました。

部員一同と共に、深く感謝をいたします。誠に有り難うございました。

茶の世界ではよく「二期一会」という言葉が使われます。文字通り「今、この同じ空間、時間を共にするのは一生にこの時一度きりである。」という事ですが、毎年十二月に催される雪待茶会もその一会を重ね、今年めでたく五十周年の記念茶会を迎えることとなりました。靖国神社でのこの茶会は、毎年の茶道部員達の精進の集大成であり、いろいろな思い出があります。中でも忘れられないのは本当に雪が降った雪待茶会です。もう数年も前のことでしたが、現在は改築に入っている洗心亭が白い雪につつまれ、不思議な静寂の中の茶会でした。

茶道部創設者の柳澤先生が茶碗を手に庭の雪景色を愛でられ、部員達も寒さを忘れ努めたものでした。

二十一世紀もすぐそこです。国境などもうない世界になるかもしれませんね。私達はますます自国の文化を大切にしなければいけません。茶道の魅力は何といっても人をもてなし、自分をいやすこと、そして生涯を通じての楽しみとなることです。茶の湯というソフトは変わることがありません。身体の中にインプットしておけばいつでも取り出してきたのしむことができます。大妻女子大学茶道部の益々の発展を祈念いたします。

松村 茂樹

茶道と言えは思い出すのが、以前講演会で聞いた、「茶席で作法にとらわれずお茶をいただくのを蘇東坡点前と言うことがあります」という故・中田勇次郎先生のお言葉です。中国宋代の文人・蘇東坡は、詩書画のみならず広く芸道に通じ、なおかつアマチュアリズムを尊んだ人だからこそ、このよ

うに言うのでしょうか。作法を解さぬ私も、今度「蘇東坡点前」でお茶をいただきに参りましょうか。

茶道部創立五十周年おめでとうございます。グローバルスタンダードなどと称しながらローカルなエゴに過ぎないことを時折見聞します。これとは逆に地域固有の文化の中に普遍性があつたりします。茶道とはきわめて日本的なものです。その中には世界に通じる普遍性があります。作法を覚え所作の美しさを磨くことを通して、お茶をさしあげる人の心を慮ることを学んでいきます。今の日本に一番必要なこの文化をこれからも伝え広めていかれることを願っています。

多摩校 師範 肥川 隆夫



千代田校 師範

一見 宗代

茶の世界ではよく「二期一会」という言葉が使われます。文字通り「今、この同じ空間、時間を共にするのは一生にこの時一度きりである。」という事ですが、毎年十二月に催される雪待茶会もその一会を重ね、今年めでたく五十周年の記念茶会を迎えることとなりました。靖国神社でのこの茶会は、毎年の茶道部員達の精進の集大成であり、いろいろな思い出があります。中でも忘れられないのは本当に雪が降った雪待茶会です。もう数年も前のことでしたが、現在は改築に入っている洗心亭が白い雪につつまれ、不思議な静寂の中の茶会でした。

茶道と言えは思い出すのが、以前講演会で聞いた、「茶席で作法にとらわれずお茶をいただくのを蘇東坡点前と言うことがあります」という故・中田勇次郎先生のお言葉です。中国宋代の文人・蘇東坡は、詩書画のみならず広く芸道に通じ、なおかつアマチュアリズムを尊んだ人だからこそ、このよ

うに言うのでしょうか。作法を解さぬ私も、今度「蘇東坡点前」でお茶をいただきに参りましょうか。

多摩校 師範 肥川 隆夫

茶道部創立五十周年おめでとうございます。グローバルスタンダードなどと称しながらローカルなエゴに過ぎないことを時折見聞します。これとは逆に地域固有の文化の中に普遍性があつたりします。茶道とはきわめて日本的なものです。その中には世界に通じる普遍性があります。作法を覚え所作の美しさを磨くことを通して、お茶をさしあげる人の心を慮ることを学んでいきます。今の日本に一番必要なこの文化をこれからも伝え広めていかれることを願っています。

多摩校 師範 肥川 隆夫

多摩校 師範 肥川 隆夫

多摩校 師範 肥川 隆夫

多摩校 師範 肥川 隆夫



茶先 羽生